

## 第52回 日韓技術士国際会議（東京）報告

A report on the 52<sup>nd</sup> Japan-Korea Professional Engineers International Conference in Tokyo

金 仁周  
KIM Injoo

第52回日韓技術士国際会議は、2023年10月28日（土）から30日（月）までの3日間、東京都港区の機械振興会館を主会場に開催された。

今回は、2023年6月に日本技術士会と韓国技術士会との間で活動交流・協力の新たな協定を結んだことを受け、会議のテーマを「日韓技術士の新しい国際交流の姿とグローバル戦略」として実施した。両国の技術士が会場に集う形式は4年ぶりであったが、オンライン中継の併行開催など、滞りなく終えることができた。

参加者数は、日本から対面参加38名（オンライン参加15名）、韓国から対面参加46名（オンライン参加38名）であった。

### 1 プレイベント（10月28日）

#### ■会長・委員長会議（15時～17時50分）

会長・委員長会議は、機械振興会館6-62会議室で開催され、日本側は黒崎会長以下10名、韓国側は張会長以下13名が参加し、両国の交流委員会委員長が通訳を担当した。

はじめに、両国会長の挨拶及び参加者全員の自己紹介があり、続いて、前日韓技術士交流委員長の須賀理事が、2022年の第51回日韓技術士国際会議の会長・委員長会議から2023年の新協定書の締結までを振り返り説明した。その後、「今後100年に向けての交流方法」、「APECエンジニアの相互認証を目指した技術士会の役割」等について議論した。

韓国側からは、日韓の交流を持続可能にするために具体的な事業を始めてはとの意見があり、「昔の技術や古い町並みをどう新しくしてゆくかの研究」、「両国で基金を設立し地域振興につながるプロジェクトの検討」などが挙げられた。また、若手同士の交流の必要性が説かれ、「APECエンジニアの二国間相互承認」や「両国技術士会の新

協定書の見直し期間を5年から10年にすること」についての提案もあった。

日本側からは、交流活動をAPECなど細かいレベル・技術分野に絞ってゆく案が挙げられた。韓国側提案のプロジェクトについては、「日本技術士会が直接関わることはできないが、興味ある技術士同士が集まりアイデアを持ち寄ることができるのでは」との考えを示した。また、新協定書の見直し期間については、「5年での見直しを基本とするが、必要な場合は10年続ける」といった柔軟な取り組みの可能性に言及した。

これらの議論が翌日の本会議でも展開されることを期待し、会長・委員長会議を締めくくった。その後、別会場で夕食会を開催し、さらなる意見交換を行うとともに懇親を深めた。



写真1 会長・委員長会議

#### ■第16回日韓女性技術士交流会（15時～18時）

日韓女性技術士交流会は機械振興会館6D-4会議室で開催され、日本側15名、韓国側7名、通訳1名の参加があった。

まず、参加者全員の自己紹介の後、宮地奈保子氏から日本側の活動報告、申浩傳氏から韓国側の活動報告があった。続いて、日本側の橋本純氏から「Green Infrastructureへの取り組み」についての論文発表があり、韓国側の金池炫氏から「韓国の気候変動影響評価」について発表があった。今、まさに直面している気候変動への取組について、実行と評価面からの興味深い内容であり、予定時間をオーバーしても熱心な議論が行われた。

#### ■日韓の技術士・学生座談会

（15時～16時30分）

技術士・学生座談会は、機械振興会館B2ホー

ルで開催され、日本の技術士2名、韓国の技術士2名、日本の学生3名、韓国からの留学生5名、及び通訳1名の合計14名が参加した。

はじめに、学生への事前アンケート（留学理由、就職・キャリアアップ、日韓技術者の交流等）の結果に沿って学生同士の対話を進めた。

留学生は、日本の技術レベルの高さと研究支援の充実ぶりに興味を持ち留学し、殆どの学生が日本企業への就職を希望しているのが印象的であった。韓国の就職は産学連携によるチューター制度が充実しているものの、卒業が決定してからしか内定をもらえない場合が多い。一方、日本は企業が多く3年次からインターシップ制度も充実しているのが高く評価されていた。

技術士からは「就職にあたり企業は国籍で差別することはなく、高い能力と知識・見識で評価することはない」とのアドバイスがあった。また、日韓技術者の交流については、今後も継続するとともに技術者の枠を超えたパートナーシップを築きたいとの想いで一致した。

最後に技術士から学生へ「お互いに学び協力し合い、途上国への発展に貢献して欲しい。そのために専門外も深く学ぶことを願っている」と締めくくった。座談会終了後には、参加した学生及び学生が所属する大学関係者から多くのお礼が寄せられた。



写真2 女性技術士交流会



写真3 技術士・学生座談会

## 2 本会議（10月29日）

### ■式典（9時30分～10時20分）

会長挨拶	黒崎靖介（日本） 張徳培（韓国）
来賓祝辞	岸本喜久雄（日本工学会 会長）
基調報告	金仁周（日本） 吳祥根（韓国）
国際貢献賞	金永川, 沈範輔
記念誌贈呈	李芝衡（前韓日技術士交流委員長） 須賀幸一（前日韓技術士交流委員長）

式典では、両国の会長による挨拶に続き、来賓の岸本日本工学会会長より祝辞をいただいた。

次に、両国の交流委員長から新協定の締結など両国技術士会の1年間の活動報告があった。

その後、日本技術士会会長から韓国の技術士2名に対する国際貢献賞が授与された。また、韓国技術士会から日本技術士会へ記念誌「韓日技術士交流50年史」の贈呈がなされた。



写真4 式典

### ■基調講演（10時30分～12時30分）

日本：佐々木聡（前国際委員長）  
「日韓技術士協力協定締結の経緯と工学教育と技術者資格に関する動向」  
韓国：吳祥根（韓日技術士交流委員長）  
「韓日技術士交流会の新協定書と将来の協力活動への期待」

基調講演では、佐々木聡氏から、今年6月8日に両国技術士会の間で締結された新協定書に関して、締結に至る過程及び協定事項についての説明があった。また、半世紀を超えて続けてきた日韓技術士会の交流を100年先まで続けるためには、APECエンジニアの二国間相互認証を目指すさらなる交流やGA・PCの連携促進や世界に向けた活動が必要であるという旨の提案がなされた。

韓国の吳祥根氏からも新協定書に基づく今後の活動方向として、深刻化する地球温暖化など世界が抱えて



写真5 基調講演

いる課題に対し、両国技術士が先導的に取り組む必要があるとの発言があった。そのため両国技術士がこれまで以上に協働して、グローバル競争力の強化や人材交流、技術力の向上等を図り、国際的な貢献をすべきとの提案があった。

## ■パネルディスカッション (13時30分～15時30分)

### コーディネータ

須賀幸一（前日韓技術士交流委員長／国際委員会副委員長）

### パネリスト 日本

佐々木聡（前国際委員長）

小林守（IPDWG、国際委員会IEA対応WGメンバー）

稲垣正晴（元国際委員会副委員長）

### パネリスト 韓国

尹錫龍（前国際協力委員長）

表昌均（国際協力委員長）

朴有賢（韓国・シンガポール技術士交流委員長）

パネルディスカッションは、新たな日韓技術士交流の姿を議論するため、①日韓技術士の相互協力に関する話題、②工学教育（GA）から技術者資格（PC）に至るIPDに関する話題、③東南アジアにおける国際交流に関する話題の3つのテーマについて、それぞれパネリストが話題提供し、その後に議論を行う形で進めた。

①のテーマでは、尹錫龍氏から歴史的に優れた日本の耐震技術を韓国でも活用、支援すべきこと、日韓両国技術士が協力してアジア諸国の技術者への支援を行うとの提案があった。

②のテーマでは、小林守氏から日韓技術士国際会議は、PCの獲得に有効な手段であり、また若手の国際的な技術士の育成のため、IPDの実装に向けて韓国技術士会と情報共有する重要性が指摘された。

③のテーマでは、朴有賢氏から、韓国と日本が、東南アジアを含むAPECエンジニアやFEIAPなどの技術者との交流ネットワークを拡大し、国際交流と協力を強化する具体的なプログラムを推進することの重要性が指摘された。

パネリストによる議論の後、コーディネータのまとめとして、新たな日韓交流は、従来の技術交流の枠を超えるものであり、日韓技術士交流委員会だけでは解決し得ないため、両国の国際委員会やその他組織と連携し、組織の再構成も視野に検討すべきことを確認して終了した。



写真6 パネルディスカッション

## ■ポスターセッション（15時50分～17時50分）

発表者 日本

①小田切明広（機械）

「カーボンニュートラルへ向けた水力発電の取組み」

②赤松幸吉（電気電子）

「充電インフラ整備の現状と課題」

③片桐勝広（電気電子／総合技術監理）

「アグリゲーター制度導入と役割」

④金仁周（建設）

「APEC Engineerの相互認証に向けた第一歩としての技術士制度の理解」

発表者 韓国

①金在勳（品質管理）

「A Study on the Machine Learning-based Defect Detection in the Flow Control Valve Production Process」

②金章烈（コンピュータシステム応用）

「The Method of Software Safety Mechanism based on IEC 61508 and IEC 60880」

③南聖源（鉄道車両）

「Development of High Speed Train in Korea」

④沈範輔（環境／廃棄物）／金煜（機械）

「A Study on the Development Status of Underwater Microplastic Collection Device」

⑤曹圭永（土木施工／土木品質試験／建設安全）

「A Proposal for Role and Mission of Professional Engineer In the 21st Century-in My experience for GMR Project」

ポスターセッションでは、最初に壇上にて日本から4名、韓国から5名の発表者がプレゼンテーションを行い、その後、会場内に展示されたポスターの前で、発表者がそれぞれのポスターについての質疑応答を行う形で進められた。

従来の分科会での発表をポスターセッション形式とした新たな試みであり、1つの会場で様々な分野の発表を聴講し、興味を惹かれた内容については、ポスターの前で直接質疑することで参加者と発表者のより深い意見交換ができ、技術交流のきっかけになることを目的としたものである。

質疑応答での通訳は、それぞれポスターごとに在日韓国留学生連合会学生ボランティアの協力を得た。熟練技術者のポ



写真7 ポスターセッション

スターの前には多くの参加者が集まり、若い世代の通訳を交えての意見交換は活況を呈し、会場全体が明るく和やかな雰囲気にも包まれた。

### ■閉会（18時）

ポスターセッション終了後、日韓技術士交流委員会の廣瀬副委員長（司会）と金委員長が会議を締めくくり、最後に、参加者全員の記念撮影を行い閉会とした。



写真8 参加者記念撮影

### ■パートナーズコース（9時30分～16時）

日韓併せて17名が参加し、深大寺と江戸東京たてもの園を訪れた。深大寺は、七五三詣でのシーズンで、お子様のキモノ姿が素敵だった。深大寺は、湧き水に神が宿るとされる聖地でもある。その水で育てられた蕎麦が美味しかった。江戸東京たてもの園は、広大な小金井公園の中にあり、公園の樹木と草原と花壇を横断して到着する。江戸時代から昭和初期までの27棟の復元建造物が建ち並び、江戸東京の建築の歴史を知る充実した内容だった。



写真9 パートナーズコース

### ■親善交流会（19時～21時）

従来の「晩餐会」は、今回より「親善交流会」と名称を変更し、来賓や余興を簡素化した形での実施となった。両国会長の挨拶・乾杯に続き、歓談の時間となり、学生ボランティアの通訳を挟みながら、参加者同士4年ぶりの再会を喜び、話に花が咲いた。

その後日韓会議50年の思い出について両国から2名ずつのスピーチがあり、次回開催地である韓国の麗水（ヨス）について大変熱心なPRが

あった。

最後に、日本側合唱と韓国側合唱で盛り上がり、全員で「上を向いて歩こう」を歌って、最後を飾った。

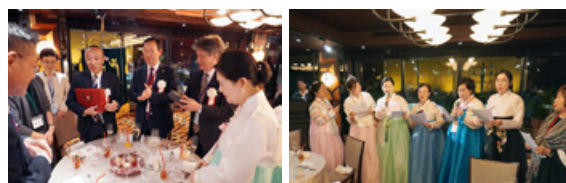


写真10 親善交流会

## 3 研修視察 （10月30日 9時30分～15時40分）

東京プリンスホテルロビーに集合し、まず東京タワー見学に向かった。前日、本会議を行った機械振興会館の正面であるが、実際にエレベーターで上がってみると開業65周年とは思えない立派さで、東京を一望することができた。特に、10月には珍しく真っ白い富士山がきれいに見えたため、参加者はしきりに写真を撮っていた。その後、バスの中から国会議事堂・最高裁判所・皇居・神保町古書店街・靖国神社等についてガイドの説明を聞きながら、赤坂迎賓館に向かった。迎賓館では、最初に主庭噴水池前で集合写真を撮り、本館へ入館した。本館、車寄及び階段、正門・堀、東西衛舎、主庭噴水池、主庭階段は国宝に指定されており、内部では、日本の建築・美術・工芸の粋を集めた豪華絢爛な調度を楽しむことができた。また展示内容からは、これまでの日本外交の歴史を学ぶことができた。

その後、昼食会場の豊洲へ移動し、食事の後、解散場所の品川駅と羽田空港に向かい、来年の再会を約束して終了となった。



写真11 研修視察（赤坂迎賓館）